

萩と夏みかんの歴史



土塀越しにのぞく黄金色の夏みかんは、萩を代表する景観の一つです。この景観は、明治維新の後に形作られたものです。

萩の町は、江戸時代に、毛利氏の城下町として栄えました。ところが、江戸時代末の藩庁の山口移転に続き、明治維新・廃藩置県によって、政治・経済の中心ではなくなってしまいました。

藩の重臣たちは萩を離れ、また萩に残った士族たちも、禄を失い日々の生活に困ることになりました。この収入を失った士族たちを救うために始められたのが、夏みかんを果物として栽培することでした。夏みかんを栽培して収益をあげるという企ては、明治9年（1876）に始められました。これを中心となって推し進めたのは、旧萩藩士の**小幡高政**です。

小幡は、もともと武家屋敷地にも植えられていて、あまり手をかけなくても実る夏みかんに注目しました。そしてこれを、主の居なくなった広い武家屋敷地に植えて、大々的に栽培しようとしています。全国でも初めての試みでした。

小幡は「**耐久社（たいきゅうしゃ）**」という団体を結成し、夏みかんの苗木を大量に生産し、士族たちに配って栽培を勧めました。また、企てに冷ややかな人がいる中、自らの屋敷地も畑として、率先して栽培を行いました。

栽培に取り組んで10年ほどで、夏みかんは大阪市場などに出荷され、高値で取引されるようになります。その後、旧城下の空き地のほとんどに夏みかんが植えられるようになり、1900年前後頃の生産額は、当時の萩町の年間予算の8倍ののぼりました。

「夏みかんの樹が3本あれば、収益によりこどもを上級学校に通わせることができた（江向 K さん）」というような状況は、その後も長く続きました。夏みかん栽培は、他の柑橘類や様々な果物類が出回るようになる1970年頃までは、主要な産業として萩の町の経済を支えてきました。

夏みかんの栽培が続いたということは、夏みかん畑に変わった武家屋敷地が大きく改変されなかったということです。そのことにより、武家屋敷の敷地割は、ほぼ江戸時代のまま現在に伝えられることになりました。また、夏みかんの実を風から守るために、武家屋敷周囲の土塀や石積み塀、長屋、長屋門などが保たれ、城下町に特徴的な景観が維持されました。



小幡高政
(1817年～1906年)

古写真で萩の夏みかんをたどる



土塀と夏みかん



夏みかんの摘果



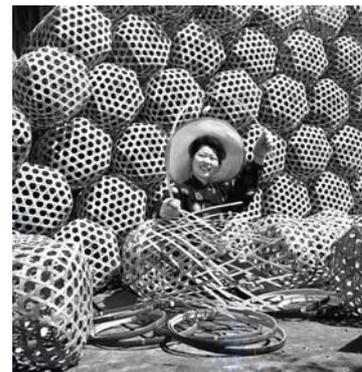
夏みかんの集果



橙籠を乗せた車



夏みかんの選果



橙籠作り



夏みかんの出荷ラベル

明治22年(1889)夏みかんの仲買商たちは、「萩夏蜜柑輸出仲買商組合」をつくり、組合員の荷物に「長州本場萩夏蜜柑」と印刷された共通のラベルを貼りつけ出荷した。

撮影：角川政治氏
昭和10年～30年代撮影
(萩博物館保管)